白道のカミーノ便り

グアテマラ③

湖渡り村々訪問、断念

グアテマラの国境の町から湖畔まで、ベアトリーチェの言う「最悪のバス」で数時間もかかった。用済みになった米国のスクールバスで、黒煙をまき散らして走る。排ガスが車内に絶えずこもっている。

道は上り下りが激しく、しかも曲がりくねっている。屋根の上に満載した荷物が急カーブで大きな音をたてる。助手は、走っているバスの窓からスルスルと屋根に上り、荷物の安全を確かめる。

乗客は皆、伝統的な衣装の人たちである。写真集で見るのと同じだが、着たきりなのか、生活のにおいがじっくりと染みついている。排ガス、体臭、民族服に染みついた生活のにおいが絡まって車内に充満している。不眠と悪路と臭気で吐きそうになる。

大きな湖のあちこちの岸辺に小さな村が点在していた。太陽もまだ高い。今日のうちにいくつかの村を見たい。宿に荷物を置き、簡単な食事を済ませると、突然ベアトリーチェが「私は行かない。宿で一休みしたあと、この町にある織物のお店を見てまわる」と言いだした。

村へ行くには湖を渡らなければならない。村々を結ぶ道はほとんど無く、村々を巡回する航路も無い。基地となる小さな町とそれぞれの村をボートで何度か往復しなければならない。片道1時間少々だが、帰りのボートの時刻を考えると、一つの村に4～5時間滞在することになる。

私の希望を、疲労と不快指数の極にある彼女に強要できなかった。2人で風に吹かれて湖を渡り、織物の村々を訪ねるというイメージは、私にとってこの旅の全てだったのに！　マンマ・ミーア！（勘弁してよ、お袋さ～ん！）

風に吹かれて湖を渡り、村々を訪ねるはずだった＝筆者写す

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。